2024年7月25日発行

地域と協同の研究センターＮＥＷＳ

239号

「地域と協同の研究センターでこれから実現したいこと」

森 政広（地域と協同の研究センター代表理事・生活協同組合コープあいち理事長）

第24回通常総会で代表理事に選出されたコープあいちの森です。よろしくお願いします。

コロナ後の社会変化

コロナ感染症による行動制限が解除されて1年、記録的な物価高と円安が続いており、コロナ禍で傷ついた人々のくらしを一層厳しくしています。世界経済は、多くの下振れリスクが存在し、将来に向けての不安が高まっています。コロナ禍における交流の場の減少や単身世帯の増加などで孤独や孤立がさらに深刻化しています。たすけあいの組織である協同組合への期待が高まっています。一方生協の事業面では、店舗事業の赤字削減と宅配事業の伸長のための投資、福祉事業は人材確保と育成が課題。社会は大きく変わりつつあり、課題を先延ばしすることはできません。持続可能な組織とするためには、厳しい選択と将来に向けての挑戦が必要となっています。

国際協同組合年に向けて

来年は国際協同組合年となります。先回2012年の国際協同組合年では、全国の生協の役員と共にイギリス(ロッチデール記念館、コーポラティブグループ店舗)、イタリア(コープイタリア本部、店舗、保育園や介護施設を運営している協同組合)を訪問しました。コーポラティブグループは金融も扱う強大な組織、コープイタリアは日本のイオンのような大きな組織でした。特にイタリアは憲法に協同組合が明記され、困ったことは協同組合で解決する(3人で協同組合が作れる)との考えで、協同組合が国民の中にも定着し、まさになくてはならない組織となっていました。日本は協同組合ごとに法律が制定され、協同組合基本法のような全体を統括する法律はありません。したがって、協同組合連携が取りづらい法制度となっています。韓国では最近、協同組合基本法が制定されたと聞いています。日本でも法的根拠が作れるような活動が必要とされています。協同組合に関する認識も国民全体に広がっている状況ではありません。地域生協も略称をコープ〇〇〇〇とするところが多く、組合員もメンバーと言い換える生協もあり、協同組合であることも知らない方も多いのではないかと思います。ましてや労働金庫やこくみん共済coopが協同組合であることを知らない人も多いのだと思います。協同組合年では、生協自身が協同組合であること、多くの国民が何らかの協同組合に関わっていること、少子化高齢化、くらしの厳しさの中で協同組合が果たしていること、果たそうとしていることを多くの人に知らせていくことが大切であると思います。さらに役職員は、協同組合原則が、自らの実践に結びついているか見直すことが大切であると思います。協同組合年を契機に、日頃おつきあいのない協同組合の皆さんにもこのようなことの呼びかけができればと思います。ぜひ、外を向いた活動にしていきたいと思います。

【２ページにつづく】

地域と協同の研究センター　7月の活動

1 日(月)　名城大学「ボランティア入門」第 13 回	15 日(月)　名城大学「ボランティア入門」第 15 回
4 日(木)　協同の未来塾①	16 日(火)　コープあいち理事研修、コープあいち監事施設点検
7 日(日)　難民食料支援「仕分発送」	17 日(水)　2024 デー記念行事 in 愛知
8 日(月)　名城大学「ボランティア入門」第 14 回	18 日(木)　三河地域懇談会、くらしと平和・憲法を守る実行委員会
12 日(金)　愛知版・災害ケースマネジメントセミナー	19 日(金)　三重地域懇談会世話人会(三重のつどい)
13 日(土)　第 21 回東海交流フォーラム第 2 回実行委員会、第 2 回理事会	22 日(月)　子どもの学習支援共同研究会
	30 日(火)　JCA ブロック会議

目次

地域と協同の研究センターでこれから実現したいこと　森政広　駒井義明	1	ウクライナ避難民Aさん、Bさんのサポートを通じて	5
高蔵寺ニュータウンの訪問報告　幸松孝太郎	3	情報クリップ	6
プチフォーラムin岐阜開催にあたって　難民食料支援品の仕分け・発送作業の報告	4	書籍紹介「農業が温暖化を解決する！―農業だからできること」	8

【１ページからつづく】

地域と協同の研究センターで取り組んでいきたいこと

地域と協同の研究センターは、研究者、各生協の組合員理事、生協の役職者、地域の諸団体の役職者が集まる場です。生協の組合員は地域で生活する皆さんですので、地域の課題や困りごとをみんなで考え合い、語り合うことができる場です。そして解決の糸口を探り当て、協同で実践できる場です。このような強みを生かし、まず生協で抱えている問題について考えあうことから地域の課題と一緒に語り合い、実践に繋げればと思います。生協も事業環境が厳しくなる中、特に人材不足は大きな問題になりつつあります。3生協で一緒にできることを増やし、特に人材育成では地域と協同の研究センターの研究者の皆さんの力を借りさらに進められないか相談していきたいと思います。

こらからも、東海3生協の皆さんをはじめ、関係する皆さんとの協力をお願いします。

（もり　まさひろ）

「地域と協同の研究センターでこれから実現したいこと」

駒井 義明（地域と協同の研究センター専務理事）

第２４回通常総会で理事に選出され、理事会にて専務理事に互選をしていただきました。私は、当時の名古屋勤労市民生協に就職して４０年がたちます。その節目に、地域と協同の研究センターの職にチャレンジできることになって、新鮮ですが、手探りの毎日を送っているところです。

私は、現場（宅配や店舗）での仕事の経験もありますが、人事や機関運営、経営管理などの仕事が一番長くなります。

それでも、生協に入った時の組合員自ら学び主体的に動く姿、深夜まで労組と理事会が喧々諤々の議論をしていたこと、役員室時代には、組合員理事自らがあいちの新しいグランドデザインとして、生協が愛知県で果たしていく役割、求められる役割を鮮明に描かれたこと、数えきれない実感を体験できたことは自らの記憶の宝物だと思っています。

さて、一般的な生協の理事会は、「組合の業務執行を決し、理事の職務の執行を監督する。」と定款で規定されています。NPOである研究センターの定款では、「理事は、…定款の定め及び理事会の議決に基づき、この法人の業務を執行する」と大きな違いがあります。組織の規模の違いだけではなく、実践者の集まりだと再認識できますし、自分もあらためて一から実践の現場に寄り添っていきたいと思います。そんな理事会づくりができればとも思っています。

社会の変化もたいへん著しいものがあります。この先がどうなるかというのは短視眼的には言えませんが、ほんの少し先の未来には、消滅する自治体が続出し、インフラの整備が追い付かず、セーフティネットも著しく希薄になることでしょう。人口減少、超高齢化の中で、みなが働くようになり、地域のつながり、支えあいも弱くなっていくと思います。私も地域の町内会長を担ったとき、状況の深刻化とつながりを広げようという両方の流れがありました。何とかしたい、解決したいという流れを広げられるよう、生協や協同組合ができることを学び、発信していければと思います。

地域の組合員活動も大切な役割を果たしてきたと思っていますが、当時の専業主婦が主体となってきた「生協運動」も変化してきました。今の時代の中で、どのような組合員活動が展開できるのか、そのような投げかけそのもの含めて考えていきたいと思っています。

私の役割として重要なのは、理事のみなさんと一緒に新しい中計をつくり、２５年からの実践につなげることです。２５年は３０周年の節目にあたります。研究センターの意義を認めてもらいながら、学びの柱となっている、理事ゼミ、未来塾、生協職員マイスターコースについて、３生協のみなさんと深めながら、見直していきたいと思います。くらしと協同の研究所の総会の一部に参加しましたが、そこでのテーマは「生協・協同組合における人づくり」でした。実践者として地域での取り組みに光をあてることも大切ですが、この先、協同組合、生協に未来をかけたいと思える、思う人を増やしていくことが重要です。この時代に可能かどうかわかりませんが、協同組合、生協でワクワクする未来を自らが語れるような人づくりを、東海の地でも取り組んでいきたいと思います。

おわりに、２５年は国際協同組合年となります。「協同組合はよりよい世界を築きます」がスローガンとなりました。研究者のみなさんとのつながりも大切にしながら、世界にも目を向け、貧困や飢餓などの様々な問題について、協同の可能性を広げていきたいと思います。　（こまい　よしあき）

高蔵寺ニュータウン訪問報告

幸松　孝太郎（地域と協同の研究センター理事）

4月26日（金）、名張8時23分発の電車で出発し、人身事故の影響で多少遅れましたが、10時過ぎに春日井に到着しました。「春日井くらしたすけあいの会」の浜田さんら3名に出迎えていただき、「コープあいちコープ高蔵寺ニュータウン店」を皮切りに、「高蔵寺ニュータウン」内を車で案内していただきました。

(1) 高蔵寺ニュータウンの課題と対応

【問題意識】

「春日井市」の代表的なニュータウンである「高蔵寺ニュータウン」は、最初の入居から56年を迎え、住民の高齢化や建物の老朽化に直面しています。私が住む三重県名張市も同様の問題を抱えており、高蔵寺ニュータウンがこの2つの課題をどのように対処しているかについて、「春日井くらしたすけあいの会」の浜田弘子さんらにご協力を頂き、見学しました。

春日井市高蔵寺ニュータウンは、昨年10月時点で約4万2千人が居住しており、65歳以上の高齢者割合は約37%（名張市は35.1%）で、市全体の約26%を大きく上回ります。急速な高齢化、集合住宅の老朽化、空き家の増加といった課題に対応するため、2016年に「高蔵寺リ・ニュータウン計画」が策定され、2021年には5年間の評価を基に2030年に向けた数値目標を追加した改訂版が発表されています。

【ニュータウン内の具体的な対応】

1. 移動スーパー「道風くん」： 藤山台・石尾台で12～13箇所を月・木曜日に運営し、高齢者の買い物支援を行っています。

2. モビリティポートによる移動手段: 高齢者の足＝移動手段に対応するため、オンデマンド乗合　タクシー、電動シェアサイクル、電動車いすが確保され、現在「ゆっくりカート」の実証実験が石尾台地区で行われていました。

3. 住環境の改善: 高森台団地の5階建て団地10棟を解体し、99区画の分譲団地が誕生予定。また、旧小学校跡地が新たに生まれ変わり、「グルッポふじとう」は図書館、ギャラリー、たまり場、食堂、貸部屋、地域包括支援センターとして活用されていました。「西藤山台運動交流ひろば」では体育館、運動場、ノキシタ広場、カフェ、有料老人ホーム、障害者グループホーム、薬局、クリニック、フィットネスジムなどに整備されました。

4. 新たな取り組み「藤山台・岩成台地区孤独・孤立プラットフォーム」：春日井市は、地域社会における孤独・孤立問題に対応するため、藤山台・岩成台地区で新たな取り組み「孤独・孤立プラットフォーム」を実施しています。このプラットフォームは、居場所づくりや多世代交流を促進し、全世代を対象とした孤独・孤立対策のモデルを作成することを目的としています。

これには、地域の活動主体が中心となり、孤独・孤立を感じる人々が気軽に参加できる場所やイベントを提供することを目指しています。この活動から生まれたアイデアの一つとして、「ぷらっと」というつながるノートが作成されました。この「ぷらっと」は、コープ高蔵寺ニュータウン店の2階に設置されており、参加者同士が自由に交流できる場となっています。当日参加している約10人の高齢者から直接「ぷらっと」についてお話を伺うことができました。この取り組みには、地域の支援団体「たすけあいの会」のメンバーが孤独・孤立を感じる人々とのつながりを強めるために積極的に関わっており、彼女らの活動がいかに重要であるかがよく分かりました。

「ぷらっと」のような具体的なツールを活用することで、人々のつながりを強め、孤独・孤立を感じることのないコミュニティ作りが進められており、これからの地域社会における孤独・孤立問題の解決に向けた一歩となることを期待したいと思います。

(2) 「春日井くらしたすけあいの会」の浜田さんからのお話

利用会員101名、協力会員18名で構成され、単発の依頼が多く、毎月の利用者は50名ほどです。主に家事援助や高齢者の見守りを行っており、病院の付き添いが最も多い活動です。そのため、昨年7月には福祉用具の職員を招き、車椅子の学習会を実施し、11月には認知症ケアの勉強会、今年2月には「だまされたらあかん！」詐欺被害防止の勉強会にも参加しました。

最後に、浜田さんは「地域で必要とされる会として、協力会員に感謝しながら、地域の人とのつながりを大切にして活動していきます」と述べられました。

帰り際に見せていただいた浜田さんの記録ノートには、利用者お一人おひとりの細かい状況が詳細に記録されており、その内容から利用者への配慮や思いやりが込められており、非常に感動した有意義な1日でした。

（ゆきまつ　こうたろう）

岐阜地域懇談会　プチフォーラム in 岐阜開催にあたって

近松香代（岐阜地域懇談会　世話人）

東海交流フォーラムでは４つの地域懇談会がそれぞれ報告を行い、興味関心のある懇談会に参加し、意見交流をしましたが、私は懇談会それぞれの取り組みを全部聞きたかったなと思いました。各懇談会の取り組みを聞くことで自分たちの活動の何かヒントになることもあります。参加者全員で共有できるような進め方が良いと思いました。

そんな中、岐阜地域懇談会では八木山地区社協ささえあい活動の取り組みを発表していただきました。発表をしていただいたメンバーは、実際地域で活動されている男性陣です。八木山の発表には、たくさんの反応があったことで、男性陣からは、「日ごろの活動で喜びを感じているが、良い経験をさせてもらった。」などの声を頂きました。地域の困りごとに男性陣が率先して取り組んでみえる活動について、参加された方には知ってもらうことが出来ましたが、岐阜の地域での取り組みを岐阜の人たちにもっと知ってもらいたいと思いました。実際、東海交流フォーラムには岐阜からの参加も少ないこともあり、これは是非、岐阜で開催し多くの人に知っていただきたい、さらには行政や他団体の方、各地域の首長さんにも声をかけ岐阜県全域に広げたい。という想いからプチフォーラム in 岐阜を開催する事になりました。

もともと、岐阜地域懇談会のテーマに「岐阜を知ろう、学ぼう！」があります。この間、岐阜の中で行っている様々な活動に触れることで、知って学び自らの活動に活かしているメンバーもたくさんいます。世話人会としても刺激を受け、地域懇談会の進め方なども考えてきました。

私たち世話人会の話し合いは、ほぼ喋りっぱなしで、実に面白く、とにかくみんな元気です。世代もばらばらですが、それぞれの想いや近況報告をみんなが発言し、その中から得るものが多くあります。今回のプチフォーラム in 岐阜開催にあたっても、八木山の取り組みをどの視点で行うのか、どのように進めるのか世話人会では実行委員会を立ち上げ、動き出しました。

先ずは、八木山の取り組みを岐阜の人たちに知ってもらい、たくさんの意見交流ができるプチフォーラムにしたいと思います。

５年ぶりの開催に向けて岐阜地域懇談会はアクセル全開です。　（ちかまつ　かよ）

難民食料支援食料品の仕分け・発送作業の報告

（伊藤小友美　地域と協同の研究センター　事務局）

難民食料支援の食料品の仕分け・発送作業（主催：アジア・ボランティア・ネットワーク東海、地域と協同の研究センター、ＮＰＯ名古屋難民支援室 協力：コープあいち）を、７月７日（日）４１名の参加で行いました。この間、「学び語り合う会」を開催しながら食料品を送る活動をしていますが、通算７回目となる今回の発送には、２５名の大学生（名城大学・名古屋外国語大学・南山大学・中京大学・名古屋大学）が参加しました。難民の方の参加もあり、交流が深められました。難民の方は、ご自身の身の安全のために、出身国については明かされません。お名前もニックネームで呼ぶことのルールを共有しました。

最初に、難民食料支援の経緯や趣旨の説明があり、次に送り先の全世帯の説明、最近の相談の傾向等のお話がありました。今回のお送り先はアフリカ出身の方々が多く、調理器具のない方もおられました（来日してまだ日が浅いため）。そのような状況を考え、とうもろこしの粉（お湯で練って食べます）と、レッドキドニーという豆をたくさん用意しました。アフリカでよく食べられているそうです。

４つのグループでは自己紹介をし合い、食品担当、メッセージカード担当、報告担当を決めました。そして、担当の送り先の情報に基づいて、分類された食品を他のグループの方と相談して分け合い、箱詰めしました。ご家族の人数や、年齢、ハラル食品の要不要、調理器具の有無等を配慮して分け合うことは、結構難しいと感じた方が多かったようです。日常的に、食品表示や賞味期限表示を見ることが少ない方もいました。

３時間ほどの作業で、１５世帯に２０箱の食料を送ることができ、さまざまな学びと交流が生まれました。

その後、名城大学のボランティア論の最終講義で、食料品が届いたというお礼のメッセージがたくさん寄せられたことの報告がありました。「今までで最大のサプライズです。いただいたメッセージを何度も何度も読み返しています。とても気に入っています。たくさんの方々の想いが詰まった贈り物は、本当に心温まるもので、とてもうれしく思います。」などのメッセージに接して、学生のみなさんも感動されていました。ボランティアに参加する動機はさまざまですが、「参加してよかった」という言葉をうれしく聞きました。　（いとう　こゆみ）

ウクライナ避難民Aさん、Bさんのサポートを通じて

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

出入国管理庁によると、ウクライナ避難民入国者数は6月30日現在2,651人、在留者数は2,013人です。男女別では男性が760人、女性が1,891人、年代別では18歳未満が425人、18歳以上61歳未満が1,862人、61歳以上が364人です。東海地域では、愛知県は122人、岐阜県は12人、三重県は1人、東京は622人、大阪は132人です。愛知県に暮らす人の数には現れてはいませんが、転出（出国）した人、転入した人がおり、実際には変化があります。東京は増加、大阪は減少しています。すでに国内に避難している人たちが、就労の機会や支援プログラムが提供されている地域へ転居するケースも継続して増えています。

Aさんへのサポートを通じて

数ヶ月前に愛知県から他の地域へ転居したAさんとは、身元保証人をしていることもあり、継続してサポートをしています。安定した仕事を見つけることが難しかったり、ちょっとしたトラブルに巻き込まれてしまったりすることもあり、戦争によって大きく変わってしまった人生の日常を、安定したものにすることは容易ではないことを感じています。また数年後の見通しを考えて人生をイメージすることも難しいため、目の前の状況に対応しながら、日々の課題を乗り越えながらの毎日です。幸いウクライナ避難民の方たちは、各自治体が把握をしています。自治体によって受け入れ体制や考え方はそれぞれですが、担当課が決まっており、担当職員がいる自治体もあります。Aさんとやり取りをしながら、現在は、Aさんの転居先の自治体の方とやり取りをしながら、公営住宅への入居の手続きを進めています。

Bさんへのサポートを通じて

戦争が始まってすぐに、愛知県在住のご家族を頼って愛知県に避難されたBさんから、自転車があると日常の生活がしやすくなると相談がありました。使われていない自転車を譲っていただくという方法もありましたが、防犯登録の手続きも考慮して、「ウクライナの方へ使ってください」といただいていた寄付で自転車を購入することにしました。

最初は、新品の自転車の購入は申し訳ないと大変遠慮をされていました。そこでご自身の生活が安定したら、将来ぜひ支援が必要な方へ恩を送ってくださいとお願いをしたところ、笑顔で応えてくださいました。

Bさんの最寄りの駅で待ち合わせをして、一緒に近くのホームセンターへ行きました。自転車売り場のコーナーへ行き、予算内の自転車の中で、どの色がいいか、どの形状がいいか、と話をしながら自転車を見てまわりました。そうしているところへお店のスタッフの方が来てくださり、「この色の方が似合いそうですよ。」とか「ギアがあると楽ですよ。坂道を走ることはありますか？」と話しかけてくださいました。時間をかけて話をしてくださったおかげで、自転車の特徴や値段を考えて、Bさんがご自身の判断で選んで決めることができました。

お店のスタッフの方達も、自転車の調整をしてくださった方、レジの方、とそれぞれ、鍵の掛け方や、万一鍵を無くした時の対応の方法、自転車に乗るときに気をつけることなど、丁寧な対応をしてくださり、たくさんの会話をしてくださいました。

ウクライナの方の中には「どこから来たの？」と聞かれて、ウクライナ出身であることがわかると「戦争は？」「ご家族は？」と人と会うたびに聞かれることに疲弊してしまっている人もいます。そのため私もそのようなことを聞かれたら・・・と少し心配をしていました。お店のスタッフの方はどなたも出身や背景をたずねることなく、とても丁寧に接してくださいました。そしてBさんとたくさんの会話をしてくださり、ありがたく思いました。

私も自転車の購入をする間、Bさんとお互いの日常のことや普段感じていることを、会話を通してお互いのことを話すことができました。普段は電話や文字でやり取りをすることが多いのですが、このように顔を合わせて一緒に何かをするという機会はとても貴重です。そのため、このような機会を大切にしています。　（かんだ　すみれ）

情報クリップ

co･opnavi　2024.7　No.866
地域のくらしに寄り添うために再スタートを切った生協の店舗
日本生活協同組合連合会　2024 年 7 月　Ａ４判　32 頁　363 円（消費税込）

＜私たちの「この一枚」＞　生活クラブ生協　東京
　生活クラブ農園・あきる野で取り組む「農福連携」
役員室　人見　愛

特集
　地域のくらしに寄り添うために
　　再スタートを切った生協の店舗
＜今日も笑顔のコープさん＞　こうち生協
＜想いをかたちに　コープ商品＞
　ＣＯ・ＯＰ大豆ドライパック
＜生協大好きママ コプ山さんの 教えて！ＣＯ・ＯＰ商品＞
　ＣＯ・ＯＰオートミール
＜地域・社会づくり REPORT＞　みやぎ生協
＜日本全国　宅配現場におじゃまします！＞
生協ひろしま
＜松丸　奨先生の食育エッセイ＞
　進め栄養！
＜明日のくらし ささえあうＣＯ・ＯＰ共済＞
コープかがわ
＜この人に聴きたい＞
　　レゴ・認定プロビルダー　三井淳平さん
＜ほっと navi＞　コープおきなわ　／　日本生協連

生活協同組合研究　2024.7　VOL.582
市民社会による政策提言
公益財団法人 生協総合研究所　2024 年 7 月　B5 判　72 頁　定価 550 円（消費税込）

巻頭言
NPO の原点は「現場」と「ひと」
　－小さな離島の自然保護 NPO から考える　長畑　誠
特集　市民社会による政策提言
市民生活とアドボカシー　坪郷　實
市民立法としての労働者協同組合法　石澤香哉子
市民と議員がつくった埼玉県ケアラー支援条例
　－日本ケアラー連盟の政策提言活動をベースに－
堀越栄子
市民立法とは何か
　－今日の動向を中心に－　勝田美穂
「香害」をめぐる市民社会のアドボカシー　大和田悠太
生協によるアドボカシー活動を考える　三浦一浩
■国際協同組合運動史（第 28 回）
　国際協同組合同盟（ICA）大会の再開に向けて②
鈴木　岳
■本誌特集を読んで（2024・5）
齋藤優子　・　中里英樹
■私の愛読書
　中山淳著『J リーグを使ってみませんか
　地域に笑顔を増やす驚きの活動例』　柳下　剛
■研究所日誌
●公開研究会
「戦争と平和をめぐる協同組合・
　　生協の歴史から学ぶこと」　8／28
●生協総研賞　「第 22 回助成事業」の応募要領（抄）

文化連情報　2024.7　No.556
会員みんなで進める安心の地域づくり　～東京都厚生連が加入しました！
日本文化厚生農業協同組合連合会　2024 年 7 月　B5 判　80 頁　文化連情報編集部 03-3370-2529＊注

農協組合長インタビュー　(97)　あいち尾東農協
　出向く営農活動で組合員との関係を強化　市川耕一
急がれる医療スタッフの技能再教育
～2024 年度診療報酬改定に伴う
　医療従事者などに必要な研修内容について
高瀬浩造
経営研・福祉研報告
　「医療・介護の連携」本格化段階の
厚生連医療・農協福祉
院長インタビュー　(350)　屋島総合病院
　スタート・オペーション・リスペクト・エフォートの
　目標掲げ、働きやすい病院づくり　斉藤　誠

食料供給困難事態対策法について
田代洋一

西濃厚生病院
新病院開院までの道のりと半年が経過した今
西脇伸二

熱帯の自然誌（100）最終回
ボルネオとの出会いから今日まで
安間繁樹

協同精神のリレー　（16）
保障仕組の開発現場　伊藤澄一

二木教授の医療時評（221）
日本の診療所は非効率で集約が必要か？
－財政審「建議」の新説の検討　二木　立

似て非なるドイツの介護制度
節約型でも支出増大　吉田恵子

野の風　霞ヶ浦編
農業者・生活者として語る（7）地域の宝・未来の宝
山口和弘

変わる日本のまちづくり（48）移動支援と地域交流支援
―NPO 法人さっぽろ福祉支援ネットあいなび①
杉岡直人・畠山明子

多様な福祉レジームと海外人材（73）
外国人介護職員の受け入れから 15 年が過ぎて
安里和晃

全国統一献立
長崎県の郷土料理　トルコライス　吉田美恵

臨床倫理メディエーション（74）
ナラティブに寄り添う対話のために
－“4 つの段階”と“4 つの循環”④　中西淑美

デンマーク＆世界の地域居住（180）
「ぶんじ寮」とクルミドコーヒー
（東京都国分寺市）①　松岡洋子

◆第 40 回厚生連薬剤師研修会　開催のお知らせ

□書籍紹介
風景をつくるごはん・知っておきたい日本の農業・食料

▸線路は続く　（187）
特急やくも　恋する伯備線　／　西出健史

にじ　2024 年　夏号　No. 688
協同組合における多様な人材確保
一般社団法人 日本協同組合連携機構　2024 年夏号　B5 判　62 頁　1100 円（税込）

オピニオン
○リニューアル『にじ』の発刊と IYC2025
比嘉政浩（日本協同組合連携機構 代表専務理事）

特集企画
協同組合における多様な人材確保
○離職・採用難のなかでの
JA の人材確保・育成への対応方向について
高山靖弘
（全国農業協同組合中央会 教育部教育企画課 審査役）
○JA を取り巻く
高年齢職員の活用に向けた諸課題とＤ＆Ｉ経営
阿高あや
（日本協同組合連携機構　主任研究員）
○JA いしのまきにおける定年延長制・
定年前短時間勤務制・職員定着に向けた取り組み
近藤浩之
（いしのまき農業協同組合　企画部　部長）
○エフコープ生活協同組合における
ダイバーシティの推進と採用及び教育制度
森　健（エフコープ生活協同組合　人事部　部長）
○移住を伴う人材確保
－群馬県上野村森林組合の取り組み
飯野　実
（上野村森林組合　業務課　課長）

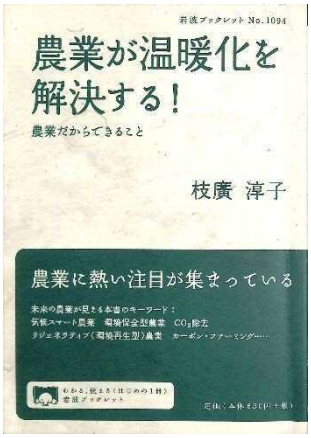
研究レポート
○外部人材の雇用にみる集落営農の組織的変化の可能性
小林　元（日本協同組合連携機構　主任研究員）

ヨーロッパの食料・農業・環境・協同組合シリーズ
［第 60 回］イタリアの有機米の生産現場から
和泉　真理（日本協同組合連携機構　客員研究員）

編集後記　阿高あや　（にじ企画チーム）

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(✤)などを中心に順不同で紹介しています（主な内容は目次等から事務局が要約しています）。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

書籍紹介



熊崎辰広会員からの書籍紹介

「農業が温暖化を解決する！―農業だからできること」

著者：枝廣淳子　岩波ブックレット No.1094

発行：2024 年 6 月　価格：630 円+税

熊崎辰広会員のご紹介

農業を環境問題との関連で考えるのに、有効な一つヒントが提案されています。特に地球温暖化に対し、農業が被害者であるとともに加害者の側面、地球温暖化ガスの発生源としての農業の現状を分析しています。そのうえで、ではどのような解決策があるのか。

その解決手段として、提案されているのが「リジェネラティブ農業」と「バイオ炭」の活用です。基本は炭素ガスを発生させない農法です。

この「リジェネラティブ農業」については本書で初めて知りました。日本語では「環境再生型農業」。その内容説明では、①不耕起栽培と②被覆作物の利用で、これだけ見ると日本の「自然農法」に近いように思えますが、③輪作④合成肥料の不使用⑤堆肥の投入などが掲げられています。輪作では、比較的広い土地が必要で、日本では向かない面もあります。全体として有機農業に近く、本書で紹介されている推進主体は、企業的経営で、グローバル企業である「ダノン」も紹介されています。家族農業としての農家の運動としての位置付けは明確ではなく、日本政府の「みどりの食料戦略システム」のなかでの「スマート農業」もしくは「イノベーション戦略」と親和性があるようです。「バイオ炭」は、間伐材や剪定枝、竹、野菜くず等、燃やすことでＣＯ２を大気に放出するのでなく、それらをバイオ炭にすることで、地域資源の循環と未活性資源の活用を図るとともに、温暖化対策にもなり一石二鳥であるとしています。これには筆者が直接かかわっています。ただその炭の製造には大きな装置が必要であり、家族農業とのかかわりも見ていく必要があります。

目次

第１章　温暖化の「原因」としての農業
第２章　農業由来の「温暖化の原因」を最小化する
　一　世界での取り組み
　二　日本の取り組みの動向
第３章　温暖化の「解決策」としての農業
　一　世界に広がるリジェネラティブ農業
　二　団体、企業、政府の取り組み
　三　バイオ炭の可能性
終　章　一消費者の役割

研究センター８月活動の計画

1 日（木）能登半島地震意見交換会
2 日（金）協同の未来塾②、協同組合研究組織交流会
3 日（土）生協職員マイスターコース②
4 日（日）能登半島地震避難者交流会
6 日（火）パレスチナ協同組合学習会
9 日（金）常任理事会③、新城市教職員組合青年部平和学習会
10 日（土）オアシス２１オーガニックファーマーズ朝市村見学会（食と農フォーラム）
13 日（火）尾張地域懇談会世話人会
20 日（火）研究フォーラム地域福祉をささえる市民協同
22 日（木）三河地域懇談会世話人会
24 日（土）友愛・協同セミナー
25 日（日）多文化社会と協同組合懇談会
26 日（月）ウクライナ避難者支援情報共有会議・岐阜地域懇談会世話人会
27 日（火）コープこうべ難民雇用視察
28 日（水）協同組合ネットあいち幹事会
28 日（水）三河地域懇談会（生協総研研究集会オンライン参加）
30 日（金）常任理事会④

地域と協同の研究センター
ホームページ
下記 QR コードでご覧ください。
ホームページ　QR コード

地域と協同の研究センター
Facebook
下記 QR コードでご覧ください。
Facebook　QR コード

※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止等のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。
参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センターNEWS 第 239 号　発行日 2024 年 7 月 25 日定価 200 円（税・送料込み）
年会費には購読料が含まれています
発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事　森 政広
〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通１－３９ TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315
E-mail　AEL03416@nifty.com　HP http://www.tiiki-kyodo.net/